慶應義塾の一貫教育

福澤諭吉の理念に基づき、実学の精神を実践する私学教育機関の最高峰

慶應義塾の起源は1858（安政5）年、中津藩奥平家の邸内に福澤諭吉が開いた蘭学塾に始まります。創立から160年を迎え、日本で最も長い伝統を持つ総合学塾として幾多の人材を輩出。その歩みは、まさに日本の近代教育の歴史といっても過言ではなく、小学校から大学・大学院までの「一貫教育」という大きな枠の中で、「独立自尊」「実学の精神」など福澤の志と教育理念を受け継ぎ、その実践に力を注いでいます。

2013年には10番目の一貫教育校となる慶應義塾横浜初等部が開校。児童・生徒の多様な個性を育みながら、21世紀のグローバル社会を先導しうる教養あふれる人材の育成に向け、新たな教育を創造しています。

「今日子供たる身の独立自尊法は
唯父母の教訓に従て進退す可きのみ」

――この言葉は、慶應義塾の創設者・福澤諭吉が1900（明治33）年に揮毫し、幼稚舎生に示したものです。慶應義塾幼稚舎では、この書を入学式や卒業式に掲げて、福澤諭吉の教訓を今日にまで伝えています。

2008（平成20）年に、日本の近代総合学塾として初めて創立150年という歴史を刻んだ慶應義塾の起源は、1858（安政5）年、江戸築地鉄砲洲に誕生した蘭学塾にまで遡ります。福澤諭吉は当時まだ数え年で25歳という若さでしたが、「全社会の先導者たらんことを欲するものなり」という熱い気概のもと、志高い幾多の人々を門下に集め、近代日本国家の建設をリードしていきました。

この間、慶應義塾はたゆむことなく独立自尊の人材を育み、その卓越した精神は「未来への先導」という今日のテーマにまで脈々と息づいています。

多くの志願者を集める慶應義塾幼稚舎の魅力とは

福澤諭吉がその歴史的著作『学問のすゝめ』において、人間の自由と平等、権利の尊さを説いたこと、あるいは門下の高弟らとともに編纂した『修身要領』に、「独立自尊」の言葉を遺したことなどは周知の通りです。

慶應義塾幼稚舎

実証に基づく科学的学問である「実学」を尊び、欧米列強に伍して日本と世界を切り拓こうとした福澤の時代精神は、まさに21世紀におけるわが国の状況とも深く重なり、響き合っています。

その福澤精神を受け継いだ幼稚舎の人気のほどは、少子化がこれほどまでに騒がれる中、多くの入学志願者を集めていることからも明らかです。2019年度の入学状況を振り返ると、男子96名、女子48名の募集人員に対して、志願者は男子970名、女子706名の計1,676名を数えています。

また、親子2代が同じ慶應義塾で学ぶ、あるいは3代、4代が「同窓生」であるという例も珍しくないのが慶應義塾の特色のひとつです。

徹底した一貫教育制度をはじめ、「独立自尊」の教育理念、「社中協力」など独自の特色が、慶應義塾の出身者に「自らが体験した学生生活の充実感や感動の体験を、自分の子どもにも味わわせたい」と感じさせているようです。

何代にもわたるこうした根強い人気に加え、福澤精神の精華を身につけた多くの卒業生が、今日の社会において幅広くグローバルな活躍を見せていることが、慶應義塾の人気をいっそう後押ししているのです。

慶應義塾横浜初等部が開校さらに幅広い教育体制に

2013（平成25）年、神奈川県横浜市に慶應義塾の10番目の一貫教育校となる「慶應義塾横浜初等部」が誕生しました。幼稚舎から大学に至るまで、多くの志願者を集めている慶應義塾の例に漏れず、7年目の今春も、入学定員男子66名、女子42名に対し、志願者数は男子763名、女子636名の計1,399名に上っています。

初等部の開校により、特色ある学校を多数擁する慶應義塾は、初等教育の段階からさらに教育の幅を広げることになりました。

初等部は幼稚舎と並び、満6歳から大学・大学院までの慶應義塾の一貫教育の源流となる学校です。初等部の卒業生は、部長の推薦により湘南藤沢中・高等部に進学。湘南藤沢中・高等部の卒業生は推薦によりほぼ全員が慶應義塾大学の全学部に進学しています。

初等部と湘南藤沢中・高等部では、大学までを見据えた新たな小・中・高一貫教育の実現を目指して、基礎学力の重視、教育内容上の連続性に留意しながら、カリキュラムの充実に向けて協力しています。

また、個々の児童については、発達段階に応じてきめ細やかに見守ることができる環境を大切にしています。両校の教員が互いに一部の授業を兼務で担当するなど、相互に交流を深めているため、児童一人ひとりを、より長い時間軸の中で、より多面的・総合的に捉えるような姿勢が両校の学校全体に醸成されているのです。

慶應義塾横浜初等部

一貫教育校の最大の魅力「全員の内部進学」を実現

私立校の中でも「一貫教育校」を目指す受験生にとって、いちばんの魅力は上の学校にエスカレーター式に進学できることでしょう。

慶應義塾の一貫教育は小学校の慶應義塾幼稚舎（渋谷区・共学）、または2013（平成25）年開校した慶應義塾横浜初等部（横浜市・共学）に始まります。

中学校には普通部（横浜市・男子）と中等部（港区・共学）のほか、湘南藤沢キャンパスに中高一貫の湘南藤沢中等部・高等部（共学）があり、幼稚舎の児童は3校（女子なら2校）ある中学校のどこに進学するかを自由に選択することができます（初等部の進路については前述の通り、湘南藤沢中・高等部に進学）。

高等学校としては慶應義塾高等学校（横浜市・男子）、慶應義塾志木高等学校（志木市・男子）、慶應義塾女子高等学校（港区・女子）に加え、米国ニューヨーク州に慶應義塾ニューヨーク学院（高等部）（共学）が設置されています。

それぞれの特色を持つこれらの学校から、最終的には高校卒業者のほとんどが、内部推薦で慶應義塾大学に進学します。大学の各学部で学ぶにふさわしいかどうかは大学が判断するのではなく、各高校がそれぞれ独自の選考に基づいて推薦を行っています。

首都圏の学校を見渡しても、希望者のほぼ全員が高等学校から大学に進めるのは、慶應義塾を除けば早稲田大学、日本女子大学くらいでしょう。さらに小・中からのスムーズな流れを考えると、慶應の“一貫体制”は、やはり際立ったものといえます。

このように、必要な成績を収めることで慶應義塾大学への進学は約束されます。ただし、慶應義塾の関係者は「大学に進学できるから」ではなく、「慶應で学びたい」という生徒こそ歓迎したいと言います。中等教育に複数の学校が設置されているのも、こうした各学校の持ち味を活かして、多様な人材が育つことを期しているためです。

慶應義塾では、中学・高校は大学の予備校ではなく、10代の多感な時に能力を蓄えるための重要な場所として位置づけているのです。

慶應義塾普通部

校風やカリキュラムに根ざす「独立自尊」の理念

親が我が子を私立校に入学させたいと考える時、進学の問題と同様に重視するファクターのひとつに、躾や良識に関する教育体制があります。

慶應義塾では厳しい校則を設ける締めつけ型の躾は行わず、児童・生徒一人ひとりの人格を尊重しています。慶應義塾の各校はそれぞれ独自の個性を打ち出しています が、基本的な理念は「自由な校風」で一致しています。

校則については、例えば湘南藤沢にはそもそも校則というものがなく「社会の良識が本校の校則」としています。他の中高も最小限のルールが存在するのみです。

服装に関してもかなりの自由が認められています。志木高では「特別な式典などを除き制服着用の義務はない」としていますし、中等部は「基準服」はあっても制服はなく、みな思い思いの格好で登校してきます。湘南藤沢も特別な機会を除けばスラックスとスカートのみの指定です。

「独立自尊」という理念は校則や服装だけでなく、カリキュラムや授業の方法にも表れています。一貫校の生徒たちにとって何よりの恩恵は、受験勉強に忙殺される必要がないことです。「一貫教育」という大きな流れの中で個性を磨き、適性や能力を自ら発見し伸ばしていく。そのために授業にもさまざまな工夫がなされています。

1年次は1クラス24名という贅沢な少人数制の普通部では、きめ細かな環境作りが期待できるでしょう。さまざまな動植物をスケッチする「フィールドノート」は3年間通して続けられ、観察眼や表現力を養うことに役立ちます。大学と同じキャンパスにある慶應義塾高校では、高校生が大学の施設を使用したり、大学の講義を受講したりすることもできます（高大一貫講座）。志木高の語学課外講座では24言語が開講され、アジアやヨーロッパの主要言語をはじめ、アラビア語やスワヒリ語まで学べます。異文化交流と情報教育を柱とする湘南藤沢中高では、『ゆとりの時間』がユニークで、「基礎数学」や「ばんかい英語」といった苦手科目のフォローを目的としたものから、「百人一首をやろう」「生命科学実験講座」まで、多彩な講座が設けられています。こうしたカリキュラムの自由さも、詰め込み式受験勉強ではできない、一貫教育ならではのメリットといえるでしょう。

慶應義塾高等学校

多様な人材、多彩な行事が「慶應カラー」を育む

外部の小・中学校から慶應に入った生徒の中には「内部生のなかにうまく溶けこめるだろうか？」と心配する人もいるようです。しかし、どの生徒も卒業する時には必ず「楽しかった」「素晴らしい友達ができた」と笑顔を見せます。そのような友人とは一生付き合うことも珍しくありません。

小学校で250人程度の児童は中学時点で約650人、高校時点では約1500人、大学では約7000人と、その数を次第に増やしていきます。「さまざまな経験を持つ多彩な人格が参画してくることで、お互いによい刺激になっています。このように育まれていく慶應独自の人のつながりが、『社中協力』といわれるもう一つの特色です」と関係者は語ります。

慶應義塾各校にはいろいろな行事があり、文化祭や運動会、遠足、林間学校などを通じて、仲間との連帯を強めていきます。学校や世代を越え、他の一貫校の生徒や大学生と交流できるのも慶應義塾の魅力です。

とはいえ「いざよく学び、いざよく遊び」と普通部の校歌にあるように、当然ながら勉強は遊びより優先されています。レポート提出が多いことからも分かるように、生徒たちは自ら考え、発展させていく主体的な学習を行っています。

一貫教育は「自動的に大学まで進学できる仕組み」と考えられがちですが、慶應義塾はこれを「より高い所を目指すために十分なエネルギーを蓄積する場」ととらえています。そのエネルギーとは知識や教養はもちろんのこと、「独立を考え、気品を持つ」という、揺るぎない福澤精神の表れでもあるのです。

慶應義塾志木高等学校

慶應義塾中等部

慶應義塾女子高等学校［左］　慶應義塾湘南藤沢中等部・高等部［中央］　慶應義塾ニューヨーク学院（高等部）［右］

「独立自尊」の人を育てる

慶應義塾幼稚舎長　　武田 敏伸

慶應義塾は1858（安政5）年、福澤諭吉が藩命により江戸築地鉄砲洲の中津藩中屋敷内に開いた蘭学塾を起源とします。

当初、塾生は10代後半から30代前半くらいが主でしたが、次第に年の若い子らも学ぶようになり、混然とした中で教育を行うには不都合が生じてきました。そこで、福澤先生が高弟の一人である和田義郎に、幼い子どもの教育を担当してほしいと依頼し、始まったのが今日の幼稚舎です。1874（明治7）年のことで、当初は「和田塾」と呼ばれていました。

その後「幼稚舎」と名称を改めて長らく三田で教育を行っていましたが、校舎が老朽化し、手狭になったこともあり、1937（昭和12）年に福澤諭吉の別邸であった現在の渋谷区恵比寿に移転しました。

その校舎を設計したのが、当時東京帝国大学の建築学科を出てまもない新進気鋭の建築家、谷口吉郎です。採光自体に工夫が施され、風通しも良い。当時は結核などの病気がはやっていた時代ですから、児童の健康に力を入れて設計されました。床下暖房も採り入れるなど斬新で、本館校舎は1999（平成11）年に「日本の近代建築20選」に選定されています。

子どもを視点の中心に置いた時に、学校建築はどうあるべきか――。そういう思想が谷口先生にありましたし、幼稚舎の教員にもありました。「お仕着せの建物の中で教育するのではない」というのが、幼稚舎の教育の根底にあります。

「3つの約束」

慶應義塾幼稚舎の使命は、端的に言えば福澤諭吉の言葉である「独立自尊」の人を育てることです。しかし、小学生に独立自尊と言っても難しいことです。そこで、入学式の時に歴代の舎長が、新入生に「3つの約束」ということをお話しします。

幼稚舎生にとってまず必要なのは、嘘をつかないこと。家庭ではお父さん、お母さん、学校では先生の言うことをきちんと聞くこと。それから、自分でできることは自分ですること。これらの約束は、戦後すぐに舎長を務め、今日の幼稚舎教育の原型を作った吉田小五郎から始まったと言われます。

それは一見、何の変哲もない言葉に思えますが、よくよく考えると、父母が子どもたちを教訓するということは、まず親が独立自尊の人でなければならないし、いわゆる親の良識がとても重要なのだということが裏側に隠されていると思います。

2000年以上昔の孟子の言葉に、「飽食暖衣、逸居して教なければ則ち禽獣に近し」というものがあります。お腹一杯食べ、暖かな衣服を着て、怠け暮らしているだけで、教育がなければ鳥や獣の生活とあまり違いがない、ということです。現代で考えれば、日本は確かに豊かな国にはなりましたが、家庭や学校、社会の中で子どもたちが引き起こすいろいろな問題を考えますと、その一端はそうした教育の不在に起因している部分があるのではないでしょうか。

基本的に学校は、読み書きや計算という教科教育が大事ですが、両輪のごとく徳育、規範の教育もしっかり行っていかなければなりません。その意味で家庭との協力が不可欠です。

これも福澤諭吉の言葉ですが、「気品の泉源」「智徳の模範」を体現した子どもに育ってほしい。それを教え育てるのが幼稚舎の役割ではないかと思っています。

16年かけて「自ら学ぶ」力を育む

幼稚舎は今年創立145年を迎えましたが、いつの時代も、幼稚舎を支えているのはそれぞれの時代の現役の教師たちです。

子どもたちにとって、勉強は教えられる部分もありますが、最終的には自分で獲得していくものです。幼稚舎では「6年間担任持ち上がり制」を通じて、そうした姿勢をじっくりと養った上で、中・高、大学と進学していきます。自ら学ぶ力を身につけた子どもたちは、学年が上がるにつれどんどん伸びていき、卒業後は専門職に就いたり、海外の大学院に進んだり、MBAを取得するような卒業生も少なくありません。

子どもたちの中には、少し奥手だったり、引っ込み思案だったり、能力はあっても競争社会ではなかなか自分を表現できそうになかったりする子どももいるかもしれません。しかし、一貫教育はそういう子どもたちにとっても、非常に適したシステムだと思います。幼稚舎から大学まで16年間かけて、「将来どういった分野で役に立てるのか」「何をやりたいか」ということをしっかりと自らが見つけることができる慶應義塾の一貫教育は、とても素晴らしい教育制度だと自負しています。